



Title	偶感
Author(s)	勝本, 忠兵衛
Citation	懐徳. 1931, 9, p. 178-179
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88843">https://hdl.handle.net/11094/88843</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 偶 感

一七八

勝 本 忠 兵 衛(談)

日本が歐米に比して科學の進まないのは、日本人は些少にしても煩はしい漢字を學ばなければならんからだ、罪を漢字漢學に歸するものがあるが、それは偏見である。今日迄我が國民道德を維持し來つたものは、何といつても漢學、殊に儒學の力であることは否むことは出來ない。

國家の繁榮は科學の進歩に俟たなければならぬことはいふまでもないが、社會生活に取つて最も大切なものは道德である。道德なくしては社會生活は出來得ない。

故に私は一方に於ては大に科學の進歩を圖ると同時に、又一方に於ては大に道德の涵養に努めなければならぬ。而して道德の涵養は漢學、殊に儒學に依るのが、古來からの例を見ても適切であると思ふ。

現今青年の間には、歐米を先進國なりとして崇拜の餘り一にも二にも西洋にかぶれ、歐米の如何なる思想も鵜呑にし、物質文明を尊んで、享樂主義、個人主義となつて來たが、殊に德義の廢頽を來して居るのは、實に慨嘆に堪へない。要するに是等は道德の涵養、精神修養の疎外より來るのである。

近時頻りに漢學廢止論が叫ばれるが、それは餘りに物質論に偏してゐることを私は遺憾として居る。

漢學は廢止するよりも寧ろ大に振興して、而して精神修養に資すべきである。併し漢學の他の學科に比し、學び難い點のあることは事實である。私は近來の漢學を輕んずるの弊風は、斯かる所からも來て居ると思ふ。

然らば漢學は如何なる方法によつて學ぶべきであるか。それは専門的に研究する者は別であるが、從來の如きやり方では到底徹底することが出來ない。これを十分碎いて、容易に誰もが學び得るやうにしなければならぬ。その十分碎いて容易に誰もが學び得る方法に就ては、私は文部當局なり、或は學者識者なりの考慮を煩したい。

今日の國民思想の頹廢は國民教育、即ち義務教育の誤れる方法より來て居るといふも過言ではあるまい。國民に健全なる思想を養はんとするならば、私は少年の間の國民教育に對しては、必須科目として孝經、四書などを加へ、これを十分碎いて授けることを希望して居る。今にして國民教育を改めなければ、日本の將來は案せられたものである、國民教育即ち少年の間に十分健全なる思想を養つて置くならば、成長後と雖も決して過激思想などを抱くものでない。是に於て私は當局が大に儒教の振興普及に、努力されんことを切望するものである。